

阿蘇の過去

そして未来

宮山遺跡から見えるもの

◇弥生時代は鉄の時代

弥生時代は、日本で鉄製品が使われ始めた時代です。中国大陸や朝鮮半島との交流が活発になり、それまで日本にはなかった鉄製品がもたらされました。また鉄の加工技術も伝わり、素材を輸入して国内でも製品を作るようになりました。いわゆる「鍛冶屋さん」は弥生時代に誕生したわけです。加工技術はしだいに広がり、宮山遺跡が栄えた2～3世紀には、多くの地域で鉄製品が使われました。

原料を国内で調達して鉄製品を生産したかどうかは、まだ確実な証拠がなく、研究者の意見が分かれます

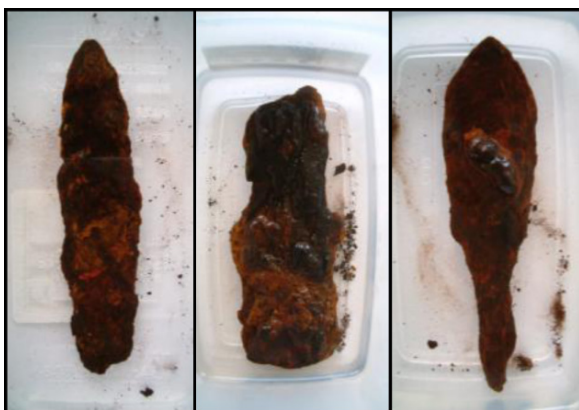


写真1 宮山遺跡で出土した鉄製品

左から鉈(やりがんな)・鉄斧(てつぼ)・鉄鏃(てつぞく)

※鉈は木材を削り表面の仕上げをする道具

が、鉄の素材は輸入に依存していたというのが大方の見方です。

輸入する素材の量は限られており、また、当時の未熟な加工技術では、効率よく大量生産するのは難しかったと思われます。

数が限られるということは、同時に希少価値が生まれ、鉄製品を欲する集落間で競争競争があったことが想像できます。鉄は優れた農具や武器に加工でき、その保有量が集落間の力関係に大きな影響を与えたと考えられます。

◇火の国は鉄の国

阿蘇を中心とした中九州地域の遺跡は、大量に鉄製品が出土することで注目されています。熊本県内の弥生時代後期の遺跡からは、多くの鍛冶場の跡が発見されています。特に、阿蘇では一つの遺跡からの出土量が多く、形が不明確なものも含めて狩尾遺跡群で318点、下山西遺跡で152点、小野原遺跡群で1,000点以上出土しており、宮山遺跡でも100点以上の鉄製品が見つかっています。これは全国的に見ても群を抜く多さです。鍛冶場や鉄製品がある遺跡は、熊本県では菊池川・白川・緑川沿いにあり、大分県では大野川沿いに多く存在しています。

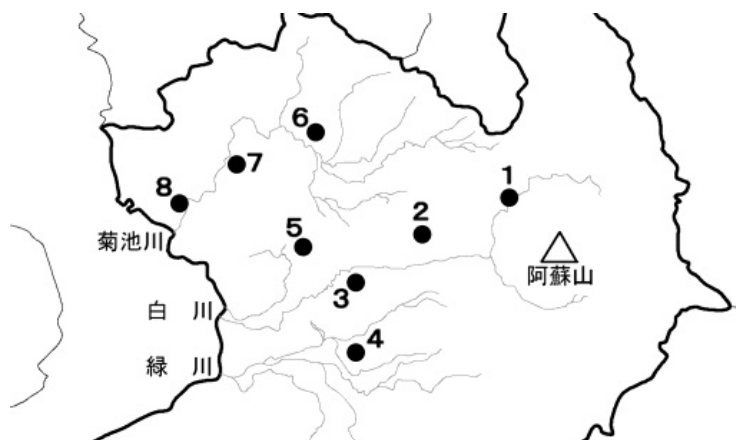


図1 鍛冶場のある遺跡

1. 狩尾遺跡群 2. 西弥護免遺跡 3. 山尻遺跡 4. 二子塚遺跡
5. 小糸山遺跡 6. 方保田東原遺跡 7. 諏訪原遺跡 8. 下前原遺跡

それらすべての川の上流は阿蘇へとつながっています。弥生時代、火の国には鉄が溢れ、その中心には阿蘇があったのです。(図1)

◇繁栄の源泉「ベンガラ」

鉄製品だけでなく、宮山遺跡をはじめとする阿蘇の遺跡では、様々な地域で作られた特徴的な土器が出土しています(図2)。

これは、様々な地域との交流が活発に行われていたという証です。弥生時代の阿蘇は決して山に囲まれた閉ざされた地域ではなく、九州の東西南北に窓を開いた文化交流の中心地だったのです。

弥生時代の阿蘇が交流の中心であった背景にはどのような事情があったのでしょうか・・・?

大きな要因は、地理的に「九州のへそ」に位置して各地域との距離が近いことと、赤色顔料「ベンガラ」の材料となる褐鉄鉱を豊富に産出することです。

古代において、赤は「生命」を象徴して死者の再生や復活を願う特別な色でした。また、邪悪を封じる強力な魔よけの力を持つと信じられ、死者を埋葬する棺の中に撒いたり、装飾古墳の壁画に死後の世界を描く顔料として使用されました。

ベンガラは、このような特殊な儀式などに用いられる物として珍重され、その需要は大きなものだったと思われる。阿蘇は、当時における最大のベンガラ輸出国だったのかも知れません。おそらく、ベンガラ輸出の利益として大量の鉄製品を手に入れることができたのでしょう。巧みなベンガラ外交により阿蘇は繁栄していったのです。

野焼きボランティアの流す汗 阿蘇の広野に輝く



▲日の尾牧野の輪地切りを手伝う90人のボランティア（2月23日）

今月、外輪山や阿蘇山麓の原野で、代々伝わる独特の農作業「野焼き」が行われます。しかし、この野焼き作業の現場が近年変わりつつあります。

十数年前から後継者不足による農業者の減少や高齢化で野焼き継続が危ぶまれ、その危機に、草原保全に取り組む(財)阿蘇グリーンストックが野焼きボランティアの導入を発案、呼びかけを開始されました。

最初のボランティア作業開始から今年で10年になりますが、これまでに、防火帯づくり（輪地切り）と野焼きに延べ約8千人もの方たちが草原に入り作業を手伝われてきました。今や、ボランティア活動なくては現在の面積での野焼きはできない現状になっています。

野焼きを再開する牧野組合

▼輪地切り場所等をボランティアに説明する岩永組合長



が減り止めていた。しかし今回、環境省や市から話があり、組合で相談したところ、皆が、阿蘇の草原再生に立ち上がり全員一致で再開が決まった。」と、雑木化した草原の野焼きが無事に終わり、緑の草地に生まれ変わる事を願われました。

「人が緑をつくる。」阿蘇の広大な草原は、多くの人たちの思いと汗により存続しています。

今年、一の宮町日の尾牧野組合（岩永照雄組合長ほか19人）が、ボランティアの手を借り、11年ぶりに野焼きを行います。阿蘇市内では田子山周辺の牧野に継ぎ2例目です。

岩永組合長によると「日の尾は根子岳の近くで谷が多く急傾斜のため野焼きには苦勞する所。人手



◇過去から未来へ
8回にわたって連載した宮山遺跡通信は、今回で最終回となります。宮山遺跡だけでなく、地中に埋もれている遺跡から阿蘇の過去の姿が浮かび上がってきます。遺跡に限らず、地域に数多く残された文化財には、阿蘇に暮らした先人たちの遠い日の記憶が刻まれているのです。
かつて、太古の阿蘇は未開の地と言われてきました。しかし、これま

での発掘調査で、阿蘇には古くから人々が生活し、様々な地域との交流を通じて、多様な文化を吸収した先進的な地域として、独自の地位を築いていたことがわかってきました。
特産物を生かして、多地域と交流した古代の阿蘇人の活躍は、阿蘇の現在と未来の繁栄を考える上で、大きなヒントになるのではないでしょう



図2 阿蘇で見られる他地域の土器

問い合わせ先

- 教育委員会事務局社会教育係
TEL 22-3229
- 宮山遺跡整理作業所
TEL 34-1643
- Eメール
kyouiku@city.aso.lg.jp